日鉄エンジニアリング
建築・鋼構造部門の事業戦略
＝下＝

鋼構造事業
橋梁商品の改良推進
免制震デバイスの海外展開加速

村上 信行常務執行役員に聞く

――18年度の鋼構造事業についてお聞きしたい。

「18年度は空港関連施設や大型アリーナなどの特殊鉄骨案件、座屈拘束ブレース『アンボンドブレース』など前年度に続き非常にハイレベルな受注を達成した。鉄構分野では東京五輪関連工事が非常に旺盛で空港関連施設や大型アリーナなどの特殊鉄骨案件を受注し、ラグビーワールドカップについても12の試合会場のうち7会場を手がけている。『TEKLA』を中心としたBIM化も推進し、タイや中国、インドなど海外の設計事務所を起用することで対応力を強化してきた」

「商品分野では鉄の免震装置である球面すべり支承『NS―SSB』の認知度が高まってきた。ラインナップ拡充や地道な営業活動により設計折り込み件数はほぼ倍増し、大手ゼネコンから基本モデルとしたいという声もいただいている。出荷試験体制も富津と堺の2拠点体制となり安定した供給体制が確立できた。また、米・カリフォルニア大学サンディエゴ校での実大動的試験を実施し、台湾やフィリピンで試験実績のPR活動を進めるなど海外展開への布石も着実に打ちつつある」

『アンボンドブレース』は出荷をほぼ達成できた。需要は非常に旺盛で既存委託工場3社の製造能力を増強し、年間1万2千本に対応可能な体制を構築している。橋梁商品についても『NSカバープレート』の認知度向上、実行案件への取り組みが進み鉄道や道路案件で採用された」

――19年度はどのような戦略を展開しますか。

「特殊鉄骨、免制震デバイス、『パネルブリッジ』など既存商品の利益率向上と超高層ビル鉄骨や『NS―SSB』、『NSカバープレート』など次期主力分野・商品の市場定着化を図りたい。巨大地震や長周期地震動に対応する制振商品の改良・開発を継続すると共に『NS―SSB』や大軸力の『アンボンドブレース』の実験データを蓄積し海外展開を進める」

――分野別では。

「鉄構分野では高稼働下において確実にプロジェクトを実行するためプロジェクトマネジャーを育成していく。ボリュームゾーンとなる超高層ビル鉄骨への取り組み強化に向け海外のS、Hグレードのファブリケーターとの連携を一層進めるなど実行体制を強化したい。また、体育館などでの採用が増えている木・鋼ハイブリッド構造は時代のニーズでもある。コストダウンや提案メニュー拡大を推進するなど力を入れていく。特殊鉄骨については設計事務所向けに設計初期段階から積極的な設計支援活動を行う。最新の設計ソフトを組み合わせ、複雑な屋根形状を短時間で設計・提案可能な設計システムを活用していく」

「鉄構分野の進んだシステムを多分野にも展開していきたい。全社方針に呼応し『デジタルトランスフォーメーション（DX）チーム』と『アナログトランスフォーメーション（AX）チーム』を設けた。DXチームは建築のIT化やBIM化、建築現場へのIT導入を検討していく。また、AXチームは組織間や世代間の壁を取り払い対話やコミュニケーションの活性化を促す」

同社が手がけた釜石鵜住居復興スタジアム

――商品分野については。

「免制震デバイスは品質保証室による第三者視点からの監査推進など品質管理体制を強化し、さらなる品質向上を実現していく。『アンボンドブレース』は今期も年間1万本程度の受注を目指すと共に収益力の強化を図る。既存委託工場におけるバランスのよい製造体制を構築することで安定供給を堅持したい。また、『NS―SSB』は耐火認定を取得し中間層免震へ適用範囲を拡大する。設計事務所やゼネコンへの定期的に見学会を開催しさらに認知度を高め、大手ゼネコンとの協業も検討していく」

「橋梁商品は事業規模拡大に伴い組織を改正し、今年4月から橋梁商品部へと格上げした。橋梁点検市場で普及拡大が進む『NSカバープレート』を軸に展開していく。施工性や景観との調和との観点から商品改良を進めると共に、自動作図システムなどの実装によって作図の効率化も図っていきたい。『パネルブリッジ』は50㍍の長支間タイプの折り込み活動を継続する。急速施工に対応した改良型も市場投入していく」

――海外でも事業展開していますね。

「フィリピンのPNS―ASTechは制振デバイスの販売を伸ばしているほか『パネルブリッジ』の商談も進むなど順調だ。アジアでの成長を取り込む海外拠点の一つとして位置付けていきたい。一方で米国や中国は一定量の市場規模はあるもののコモディティ化が進んでいる。営業戦略の見直しを図っていく」

（村上 倫）